

Title	懐徳堂学派の『論語』解釈 : 「異端」の説をめぐっ て
Author(s)	湯浅, 邦弘
Citation	懐徳堂研究. 2016, 7, p. 3-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/60533
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懐徳堂学派の 『論語 解釈 異端」 の説をめぐってー

序言

日本に伝来した朱子学は、日本の文化と学術に大きないように大阪の懐徳堂でも、優れた経書解釈が行われが、さらに大阪の懐徳堂でも、優れた経書解釈には厳しい批判も浴びせられた。従来の研究では、特に、江戸時影響を与えた。その一方で、朱子学の経書解釈には厳しいよい。

予測されるからである。の解釈が各々の学問的立場を端的に示す可能性があると

湯

浅

邦

弘

一、朱子学における「異端」と「小道」

在を指摘する。 程子は、楊朱・墨翟以上に害を為す異端として仏教の存翟の如く聖人の道から外れた教えであると説く。さらにでは、「攻」は治めるの意とし、「異端」とは、楊朱・墨では、「攻」は治めるの意とし、「異端」とは、楊朱・墨先ず、朱子学における解釈を確認する。『論語集注』

氏之言、比之楊墨、尤爲近理、所以其害爲尤甚。學於無父無君、專治而精之、爲害甚矣。○程子曰、佛非聖人之道、而別爲一端、如楊墨是也。其率天下至范氏曰、攻、專治也。故治木石金玉之工曰攻。異端、

(『論語集注』為政篇) 者當如淫聲美色以遠之、不爾、則駸駸然入於其中矣。

ざれば、 当に淫声美色の如くして以て之を遠ざくべし。 理に近きを為す。其の害尤も甚しと為す所以。 ら治めて之に精ならんとするは、害を為すこと甚し。 天下を率いれば父を無みし君を無みするに至り、 ずして別に一端を為し、楊墨の如き是れなり。 を治むるの工を攻と曰う。異端とは、聖人の道に非 范氏曰く、攻とは、 ○程子曰く、仏氏の言、之を楊墨に比ぶるに、 則ち駸駸然として其の中に入る。 専ら治むるなり。 故に木石金玉 尤も 学者 其の 爾ら 専

こう。

(工物が批判されるのは、楊墨の言に比べて一見「理」 (人教が批判されるのは、楊墨の言に比べて一見「理」 (人教が批判されるのは、楊墨の言に比べて一見「理」 (人教が批判されるのは、楊墨の言に比べて一見「理」

家衆技、猶耳目鼻口、皆有所明而不能相通。非無可小道、如農圃醫卜之屬、泥、不通也。○楊氏曰、百

張篇) 觀也、致遠則泥矣、故君子不爲也。(『論語集注』

ち泥む。故に君子は為さざるなり。

す。観るべきもの無きに非ざるも、遠きに致せば則
鼻、口、皆明らかにする所有りて相通ずること能わ
・ はざるなり。○楊氏曰く、百家の衆技は、猶お耳、目、
・ 世ざるなり。○楊氏曰く、百家の衆技は、猶お耳、目、

君子は為さないとする。と定義する。いずれにしても、「遠きに致せば」泥むから、は触れず、「農圃、医、卜の属の如きもの」「百家の衆技」このように、『集注』では、特に「異端」との関係に

一、伊藤仁斎『論語古義』

七~一七〇五)である。のは、江戸時代前期に京都で活躍した伊藤仁斎(一六二のは、江戸時代前期に京都で活躍した伊藤仁斎(一六二の)と、新たな説を提示した。

つに揃わぬことを言うとする。学問は根本に力を注ぐべつまり俗語であるとした上で、ものの端がまちまちで一先ず、仁斎は「異端」という用語は、当時の「方語」

子

倒であると説く。 関であると説く。 関であると説く。 関であると説く。 関であると説く。 関であると説く。 関である。また、後世、「道徳仁義」 はかりだ、という理解である。また、後世、「道徳仁義」 さのに、それを端の方から揃えにかかっても害がある

ち益無くして害有るなり。に用いずして徒にその端の異なる所を治むれば、則て一ならざるを謂うなり。言うこころは、力を根本攻は、治なり。異端は、古の方語、其の端相異にし

○後世の学、力を道徳仁義に用いずして徒に事に記録の後世の学、力を道徳仁義に用いずして徒に事に記録がある。本末倒置、語詞章に従いて、其の多寡を争い、其の短長を較ぶ語詞章に従いて、其の多寡を争い、其の短長を較ぶ

○論に曰く、

異端の称は、

古より之れ有り。後人の

ちて後に害有らんや。(『論語古義』為政篇) 暴行にして、亦た異端の上に在り。豈に攻むるを待 称せざること。若し夫れ仏老の教は、即ち所謂邪説 称せざること。若し夫れ仏老の教は、即ち所謂邪説 の時、或は邪説暴行と称し、或は直ちに楊墨の徒と 専ら仏老の教を指して異端と為す者は誤れり。孟子

について、仁斎はどのように解したのであろうか。とするのは鋭い指摘である。それでは、子張篇の「小道」ここには、独特の見解が見て取れる。「異端」を「方語」

(『論語古義』子張篇) (『論語古義』子張篇) が道とは、諸子百家の属の如し、是なり。 かに俗士庸輩、多く悦びて之を為す。 なに観るべき者有りと雖も、君子は為さざるなりと。 かに観るべき者有りと雖も、君子は為さざるなりと。

ときには通じないから、君子は為さないのだと説く。「諸して一定の評価を与えている。しかし、「遠きに致す」とした上で、即効性があるもの(見るべき者がある)とこのように仁斎は、「小道」を「諸子百家の属の如し」

はこの二つの関連性については直接明言していない。ると読み取ることができるかもしれない。しかし、仁斎子百家」を媒介として「小道」と「異端」とが通じてい

三、荻生徂徠『論語徴

ように独特のものであった。七二八)である。この章に対する徂徠の解釈は、以下の七二八)である。この章に対する徂徠の解釈は、以下のさらなる異説を唱えたのは、荻生徂徠(一六六六~一

成すの理有らんや。蓋し攻は、「鼓を鳴らして之を 成すを謂うなり。 攻木の工」(冬官、考工記)に本づく。治めて器を 然れども孔子の時に、豈に諸子百家有らんや。 謂うなり」と。朱子之に因り、旁ら仏・老に及ぶ。 と対して言う。故に正義に曰く、「諸子百家の じうせざるなり」と。異端は明解無しと雖も、 り。故に塗を殊にして帰を同じうす。異端は帰を同 ・攻は治むるなり」とは、諸を『周礼』の「攻金の工、 「攻乎異端」、古註に「攻は治むるなり。善道は統 諸を道芸に用うべからず。故に「六経を治む」 古是の言無し。況んや諸子百家を治めて之を 故に攻の字は諸を学ぶ者に用うべ 書を 善道 有

> り。 為政篇 に定説と為れり。「也已」は「学を好むと謂うべき 時の忌諱を避け、特に新義を設く。後儒察せず、遂 則ち必ず魏の帝の勅を奉じて作りし者なること、唐 非ず。孫邕・鄭冲・曹羲・荀顗・何晏 名を署すれば、 端なり」と。乃ち孔安国・王粛の輩に、必ず此の解 以て之を攻むれば、必ず変を激するに至らん。 晋の諸史に稽うるに、多くは人の異心を懐く者を謂 だしと為す者有り。皆誤れりと謂うべし。(『論語徴 て止むと為す。 のみ」の如し。 の『正義』、明の『大全』の如くならんのみ。故に 魏は漢の祚を篡い、異端を攻むるを以て務めと為せ 有らん。故に諸史の用うる所は、其の解に依るのみ。 語』『家語』に見え、而して『家語』註に、「猶お多 孔子は之を誡しむ。異端の字は它に見えず。独だ『論 えり。乃ち多岐の謂なり。 攻む」(先進篇) 何晏の『集解』は序文に拠れば、何氏の私書に 明祖 此の方の学者に、復た已を解して甚 の攻の如し。 (明の太祖洪武帝)は已を解し 人の異心を懐くを、 異端とは、 諸を漢 故に

意とする点である。『論語』先進篇の用例「鼓を鳴らしここでの最大の特色は、「攻」を、攻める(攻撃)の

と雖も必ず観るべき者あり。(「論語徴」子張篇)子百家は、応に是くの如しと作して観るべし。仏老子百家は、応に是くの如しと作して観るべし。仏老子百家は、応に是くの如し」と。之を得たり。何晏は以て農圃毉トの属の如し」と。之を得たり。何晏は以て農圃竪トの属の如し」と。之を得たり。何晏は以て農圃竪トの属の如し」と。之を得たり。何晏は以て

ると評価する。 して)見るべきであり、仏・老にも必ず見るべき所はある。しかし、現在では、諸子百家もそのように(小道とついては、当時「諸子百家」はいなかったとして否定する」とする説を肯定するが、「異端」とする何晏の説に風」とする説を肯定するが、「異端」の「如農圃醫卜之

> に捉えられたであろうか。 こうした徂徠の説は、大阪の懐徳堂学派にはどのよう

四、五井蘭洲の「異端」説

である。本書の冒頭に、寛延三年(一七 うに理解したのであろうか。そこで先ず手がかりとなる 篇となしたという。ここから、 身が記した題言があり、 によって著した随筆で、弟子の中井竹山・履軒兄弟によっ 後、これが懐徳堂の基本的精神として継承されていった。 あった。しかし、 問所「懐徳堂」では、初代学主の三宅石庵(一六六五 できる。 (一七六七) に大坂の文淵堂・得宝堂から刊行され て校訂され、同じく蘭洲の『瑣語』とともに、 のは、『質疑篇』である。『質疑篇』は、 一七六二)によって厳格な朱子学の路線が確立され 一七三〇)の折衷的な学風が「鵺学」と批判されることも それでは、蘭洲は、この「異端」や「小道」をどのよ 享保九年(一七二四)、大阪町人によって設立され 疑問点があるごとに記しておいた文章をまとめ 助教に就任した五井蘭洲 普段から中国の経史の諸書を読 蘭洲の見解を窺うことが 五〇) 五井蘭洲が漢文 明和 た書 四

周禮、 國家大業、 謂專為其業也。 條貫。然亦一道、 攻乎異端。 攻金攻木。是れ攻金者不攻木、攻木者不攻金、 皆欲使學者務為君子儒之意也。(『質疑篇』) 異端、 則拘泥有害矣。 斯害而已、 有可觀者。攻治也。 子夏所謂小道之類、 亦恐泥之意。治之欲措之 孔子之辭峻切、子夏之語 范註、專治也。 與聖人之道異

有り。 害有り。 治め之を国家の大業に措かんと欲せば、則ち拘泥し、 うなり。 木を攻むる者は金を攻めず、専ら其の業を為すを謂 攻め木を攻むと。是れ金を攻むる者は木を攻めず、 の道と条貫を異にす。然るに亦た一道、 異端を攻む。 務めて君子儒為らしめんと欲するの意なり 攻は治なり。范註、 斯れ害のみ、 孔子の辞は峻切、 異端は、 亦た泥むを恐るるの意。 子夏謂う所の小 子夏の語は較緩、皆学者 専治なり。『周礼』、 道 観るべき者 の類、 之を 金を 聖人

るとする。そして、為政篇の「異端」と子張篇の「小道」ものであるが、これも一つの道であり、見るべき所はあに指摘する。そして、異端とは「聖人の道」とは異なる類であると、先ず「異端」と「小道」との類似性を明確 ここで蘭洲は、「異端」とは、子夏のいう「小道」の

筆を開始、 とめた『非物篇』を検討してみよう。 である。蘭洲は江戸在住中に徂徠の著に触れ、 井蘭洲の主著で、 解が記されていない。そこで次に、 は「小道」との関係に注目して、その意を説くのである。 子儒」たれと説く点では同じだと説く。「異端」は『論語 を比較して、孔子の言葉 中井竹山によって校訂・浄書された。 の中でこの一条のみに登場する特殊用語であるが、 ただし、ここには、荻生徂徠の『論語徴』に対する見 は「較緩」という違いはあるが、いずれも学者に「君 蘭洲没後四年にあたる明和三年 荻生徂徠の (異端)は「峻切」、子夏の語 『論語徴 蘭洲 『非物篇』] を批判したも の徂徠批判をま 本書の執 は、五 小

問者、 非日、 礼 \exists 徂徠何以言古無是言也。 笑之甚。 謂專為其業也。 子禦寇之言」。 攻金攻木。 固矣哉、 皆云治其書治其經也」。是矣。 皇疏曰、 高叟之為詩也」。治國亦謂之為邦。 莊子曰、「治詩書礼樂易春秋六經 是攻金攻者不攻木、 一古人謂學為治。 何必兼成器之義。人懷異心之說、 攻訓治者、 故書史載人專經學 猶訓為也。 荀子曰、一治列 攻木者不攻金。 可

彼又曰、

泯没名不傳者、 可必其無乎。管仲老聃之倫、 (『非物篇』為政篇 猶有在焉。 安得以今不存遽断其無焉 亦自立一家之言。 其侘

彼又曰く、「孔子の時、豈に諸子百家有らん」と。 べきの甚だし。 器を成すの義を兼ねん。人 異心を懐くの説、笑う めず。専ら其の業を為むるの謂なり。何ぞ必ずしも 金を攻むる者は木を攻めず、木を攻むる者は金を攻 を為むると謂う。『周礼』、金を攻め木を攻む。 高叟の詩を為むるなり」。国を治むるも亦た之を邦 猶為と訓ずるがごときなり。『孟子』曰く、「固より、 を以て古に是の言無しと言うや。攻 治と訓ずるは、 なり。『荀子』曰く、「列子禦寇の言を治む」。『荘子』 皆其の書を治めて其の経を治むと云うなり」と。是 故に書史人の経を専らにし学問する者を載するに、 非に曰く、皇疏に曰く、「古人学を謂いて治と為す。 「詩書礼楽易春秋の六経を治む」と。 徂徠何 是れ

> 当時まだ諸子百家はいなかったと言っているが、孔子に そのように断定することはできないとも説く。 先行する管仲・老子、さらに無名の学者はいたはずで、 と同訓であり、 文献の用例から検討して、「攻」は治めるの意で、「為」 間違っているとする。また、「異端」について、徂徠は このように、 攻める(攻撃) 蘭洲は、『荀子』『荘子』『孟子』などの古 の意とする徂徠の解釈は

ろ う。 う。 この点からも、先ず諸書に対する蘭洲の見解が『質疑篇 明になっていることが分かる。従来、 筆された、という前後関係を想定することができるであ として徐々に蓄積されて行き、その後、 物篇』との関係については、明確な指摘がなかったが については、『論語徴』を強く意識して『非物篇』が執 『質疑篇』の見解に比べると、徂徠への対決姿勢が鮮 『質疑篇』 『論語』 の部

Ŧ, 『論語聞書

あろうか。 ある。それでは、こうした批判は、 いずれにしても蘭洲は、 蘭洲前後の懐徳堂関係者の見解を検討してみ 徂徠の説を全面批判するので 蘭洲独自のもので

せざるを以て遽かに其の焉無きを断ずるを得んや。

よう。

名の伝わらざる者、

猶お在る有らん。安んぞ今存

老聃の倫、亦た自ずから一家の言を立つ。其の侘泯没 孔子已前も亦た豈に其の無きを必すべからん。

管仲

義者の名が記されておらず、五冊目には識 記されたのは宝永三年 速記し、 をあげることができる。 二年(一七一二)、四冊目は正徳三年(一七一三) されている。 名交じりの口語体で、 堂初代学主、五井持軒は五井蘭洲の父。 六四一~一七二一)による 三宅石庵であったことが分かる。 「論語」 先ず、 講義をした人物は一~三冊は五井持軒、 全編の講義が収められ 後に改めて清書した書である。三宅石庵は懐徳 洲 各冊末尾の識語によると、 以 前 0) 石庵・持軒の口吻そのままに記 論 (一七〇六)、二・三冊目 これは、三宅石庵と五井持軒 語 『論語』 解釈とし ている。 ただし、 の講義を、 全六冊からなり、 一・六冊目 て、 文章は漢字片仮 四冊目 語 説がな 論 受講者が 六冊目は である。 には は 聞 が 正 講 徳

状況を知る上で、 るが る姿勢が窺える。 く関わっていた。 の門人たちが後に 講義が行われ 実生活に即 0 すでに石庵と持軒とは親交があった。 語集注』をテキストとしているが、 町人であったためか、 たのは懐徳堂創立 た例をあげ、 従って、 極めて貴重な資料である。 石庵の門下生となり、 本書は草創期懐徳堂の学問 受講者を教化しようとす 初学者にも理解できるよ (一七二四) 懐徳堂創設に 受講者の 講義 また、 以前 であ 的

> △子 テ ニヨリテ見識チガフ故ニ聖人ノ道ヲ心得ソ 舜ノ道ニチガフタル ラズシテワキへソレタルコト テル ij 異端ナリ。 ヨキト定メテソレヲ行ナフガ異端ナリ。 タル ア男 日攻 異端ニサマザマアルナリ。 人ノムマレツキサ コトヲスルガ異端ナリ。 端ト云ウナリ。 -聖人ノ 今時 / 道ニカ ノ儒者ニモ異端多キナリ。 コト 7 ザ コ *)* \ ヲスルガ皆異端ト云 ·マアル リテ レ上ナル ヲスルガ異端 トカク堯舜 コ 故二 } 人人ノムマ 日 ナ 一聖人 ij ĺ Ź 道 ショー コ ノ道 ナ ノ道 ル ij ナ コト ツキ フ ア知 <u>ر</u>ر 夕

ナキ 山 其 率 如 ナリ。 楊 孔子仰セラル コレ孟子ニアリ。 楊墨ハ カヤフナ者ヲ云フト ル 異端ガ楊墨ト云フコ 楊墨カヤフニスル ì 1 天下 デハ

ノ君モ父モナクナル

パナリ。

ク似 佛氏ガ道 来 屋日 タホ ナリ。 أزا 理 K 佛氏モ異端ナレドモ孔 人ト 似夕 道卜 故二 フカキナリ。 ーリチ ル 同 圏外ニアリ。 ホ ガ j. Ť フナコトヲ云フ故ニ大イニ ル F 理ニチカキ故ニ害甚シキナ ノスル ナリ サ コ 子ヨリ ŕ 1 、異端ニ浅 フ カキナリ /١ ル カ後 深アリ。 唐

リヤスキナリ マラヌ故ニ大イニ遠ザクルガヨキナリ。 佛氏ニハマ

成書 為政篇、 二禁制シテ遠ザクベキ者ナリ。(『論語聞書』 第一冊、 ムナリ。 近ク聖人ノ道ニ似タル故ニソノ説ヲ聞トヒトシク馬 ヲ學ビテ見ンナドト云フテカカル時ハソノ説道理ニ ヲ遠ザクル如クニキビシク遠ザケズシテ、 不楽 キ學者タル者佛氏異端ヲ遠ザクルコト、 ナリ。淫声美色ハ學者ノ大イニ戒ムル所 サシニカケル如クニーサシニ佛氏ノ學ニカケコ ―遠ザケル カケコムトハヤ害アルナリ。故ニ學者大イ 五井持軒講、 時ハー 宝永三年八月十六日、 サシニ佛氏 ノ學ニ ノ者ナリ。 荷モコレ 淫声美色 飛ビコム 加 藤信

るが、孔子より後に中国に伝来したのであるとした上で、 はあくまで例示であると説く。また、仏教も異端ではあ 軒は、「異端」がそのまま「楊墨」なのではなく、「楊墨 あるとする。 に聖人の道と類するところがあり、 異端にも深浅があり、 これは、 蘭洲の父の五井持軒の講義である。 似ているからこそ害も深く、 仏教の道理は深く、理に近いが故 かえって大いに害が 見識の定まら ここで持

ない学者は仏教にはまりやすいので、遠ざけるのが良い

と注意する。

記録しているであろうか。 は、「小道」について、 仏教に対する独自の立場を窺うことができる。 『論語聞書』 はどのような講義を それ

サキ道デモ必ズ尤モジャト云フテマナコヲワケ ワタシ吉凶ノコトハト者ニワタスナリ。 テコノクスリガヨシト云フ時ニトシテソノ薬凶 クトツカエアル モッテユクコトナラヌナリ。 ナヅミツカエテサキヘモツテユカレ 云ウコトアリ。 △子夏日 ヒトトヲリヅツナル故ニ大道ノゴトクニアチコチ ルコトアリ。 雖 致 たり。 コレツカエナナリ。 ケレドモ君子ノ大道トチガフテ小道 ソレヲ遠クモテユクコ タトヘバ医デ云ヘドモ脉 小道ハ遠キヘモッテ 故二 ヌコト 病 \vdash ・ナリ。 ハ ナ ij 医者ニ ヿナド ガヲミ ハミラ 泥

/\ ル

六冊 リ。元来ハ道ノハシナリ。ソレニ後ニ尾ヒレヲツケ テ全体ヲスマスナリ。医ハ病ヲナヲス一トヲリナリ。 モ全体エカケテ小サキコトヲ後ニ道ト云タツル 小道 吉凶ヲウラナフートヲリ 許行ナゾカ農ヲ道トスルナリ。皆々道理アレド 子張篇、 ―農家圃家ト云フモノ漢ノ藝文志ニアル 三宅石庵講、 ナリ。 宝永三年暮春十七 (『論語 聞書』 H ナ ナ

加藤信昌書

思われるが、「異端」との関連性についてはまったく言 えば、朱子『集注』でも例示される医とトと農とは、 あるが、君子の大道とは異なり、 及がない。 できないという。「小道」に対する適切な理解であると 域を異にし、それぞれの分があり、 いので、大道のように応用範囲が広くはないと説く。 には言及せず、小道でも、 庵である。ここで石庵は、「小道」と「異端」との関係 論 語聞書』 第六冊に見える子張篇の講義者は三宅石 もっともだと評価できる点も 小道は一通りに過ぎな それを超えることは 例

に着想を得た可能性があろう。ないことが分かる。あえて言えば、父の五井持軒の講義けたのは、懐徳堂初代学主三宅石庵の影響によるのではけたのは、懐徳堂初代学主三宅石庵の影響によるのではこれにより、蘭洲が「異端」と「小道」を強く関連づ

六、竹山と履軒

後に懐徳堂第四代学主となった中井竹山(一七三〇~一ちはどのように受け止めたであろうか。蘭洲の弟子で、それでは、こうした蘭洲の独特の見解を、その弟子た

− 竹山の『淪浯』解釈は、『非敳□八○四)の見解を確認してみよう。

展開していることが分かる。ば、竹山は、蘭洲の立場をさらに鮮明にして徂徠批判を蘭洲の『非物篇』と同時に刊行されている。それによれ、竹山の『論語』解釈は、『非徴』としてまとめられ、

○攻乎異端章

通。(『非徴』為政篇) 諸史、而未嘗舉一語以証。……如觧以懐異心、皆不非曰、徂徠好旁引曲證。……獨是章、唯曰稽諸漢晋

えようとした徂徠を批判する。 一方、「小道」についても、仏・老に一定の評価を与

○雖小道章

誤也。(『非徴』子張篇) 非曰、……徂徠既従朱注、又挿入佛老、蓋襲謝氏之

にはい、さらに仏・ では『論語聞書』にも見られた通りであり、 さいを襲ったものだと痛烈に批判している。こうした仏 ここで竹山は、徂徠が朱子『集注』に従い、さらに仏・

『論語雕題略』を経て、『論語逢原』として完成した。はどうであろうか。履軒の『論語』解釈は、『論語雕題』では、竹山の弟である中井履軒(一七三二~一八一七)

攻比於治、稍有費力之意。如斯而已。註專治、未允。○子曰、攻乎異端、斯害也已

異端、便是害矣。不必待專精也

一世之風習矣。 一世之風習矣。 自今覩之、佛氏之學、絶無近理者、或更遠於楊墨矣。 自今覩之、佛氏之學、絶無近理者、或更遠於楊墨矣。 自今覩之、佛氏之學、絶無近理者、或更遠於楊墨矣。

説亦通。張呂謝楊諸子、皆以攻擊爲説、但解害與此言曰、道之不明也、異端害之也。害字與此正同、此非徒以異端乎吾也、特以其害道害人心而已。程子有一説、攻是攻擊之攻、謂排擊之也。言排擊異端者、

不同。

(『論語逢原』為政篇

のは妥当ではないとする。やや力を費やす意味だとし、『集注』が「專治」とするを軒は先ず、「攻」(おさめる)について、「治」より、

とがなかったのだと指摘する。とがなかったのだと指摘する。とがなかったのだと指摘するの外害を免れるこが、宋代には禅が盛行し、程子らもその外害を免れるこが、宋代には禅が盛行し、程子らもその外害を免れることを指し、禅は仏教の中の異端であり、仏の本法ではないが、宋代には禅が盛行し、程子らもその弊害を免れることがなかったのだと指摘する。

洲や竹山によって充分行われていると感じられたからで関心といった風情である。これは、徂徠批判がすでに蘭兄の竹山が徂徠を厳しく批判したのに対して、履軒は無のも一説であるとし、特に徂徠の説には言及していない。 ることに主眼がある。そこで、「攻」を攻撃の意とするることに主眼がある。そこで、「攻」を攻撃の意とする このように、履軒の見解は、「攻」と「治」との微妙

ない。あろう。決して、蘭洲や竹山と立場を異にするわけではあろう。

そのことは、次の「小道」解釈によって明らかである。

○子夏曰、雖小道、必有可觀者、致遠恐泥、是以君

(『論語逢原』子張篇) 小道、謂異端諸子百家、是也。農圃醫卜、包在其中。

連づけるのは、蘭洲以来の懐徳堂学派の特色だと言って包括されるとする。小道と異端・諸子百家とを明確に関とし、朱子『集注』の例示する「農圃醫卜」はその中にここで履軒は、「小道」を「異端・諸子百家」である

極めて示唆的である。

と推測される。 そうした観念が、この扇に反映されているのではないかなお、履軒は、「聖賢扇」という器物を残しているが、

が写したものが懐徳堂文庫に残されている。れて存しないが、文政三年(一八二〇)に履軒の子柚園酒にたとえて面白く評を加えたものである。原本は失わ酒にたとえて面白く評を加えたものである。原本は失わ聖賢扇は、中井履軒が扇面の表に歴代の聖賢や学者の聖賢扇は、中井履軒が扇面の表に歴代の聖賢や学者の

そこでは、孔子孟子の正統儒学が「伊丹極上御膳酒」を言えよう。

結語

をとったのか、懐徳堂学派を中心として追究してきた。也已」をめぐって、日本の儒学者たちがどのような立場以上、本稿では、『論語』為政篇の「攻乎異端、斯害

注

 $\widehat{1}$

懐徳堂の基礎的な情報については、

懐徳堂事典』 及び

(湯浅邦弘

大阪大学出

版会、

二〇〇一年)、

「懐徳堂研究」

浅邦弘編著、

汲古書院、二〇〇七年)

参照

Ш 徠 れたが、 Н (T) ・履軒にも引き継がれた。 本に伝来した朱子学は、特に荻生徂徠によって批 異端」 懐徳堂の五井蘭洲は、 解釈を厳しく批判 朱子学擁護の立場から徂 それは弟子の 单 判さ 井 竹

なのであった。 用語なのではない。 は、 端」は、 反応したと言えよう。 にとって、諸子百家や仏教以上に強く意識されていたの て、その意味内容を異にした。そして、懐徳堂学派 諸子百家や老子、さらには仏教など、後世の注釈者によっ されたのである。『論語』のこの条についても、「異端」は、 立が深まる中で、 た訳ではない。 第一に仏教を指したであろう。ただ、この『論語』 もとより、 実は、 中国古代において、もともと仏教を意味してい 徂徠学派であった。 当 中 時 「異端」 国や日本に仏教が伝来し、 の日本の儒者にとって、 自らの学問的立場を示す重要な言葉 異端」 の最たる者として仏教が意識 は、 彼らは、この語に敏感に 単なる 「論 異端 儒教との対 語 いの人々 0) とは の — 異

たりするなどの措置を講じた。

2

- だし、 篇序」 九×十 て、 『質疑篇』 け原文に忠実に翻刻するよう努めたが、 全四十一葉。 十九·六×十三·四㎝。「質疑篇序」(中井竹山による)は二十 十三・四㎝。ただし、 堂刊本。 文庫蔵。 「刻質疑瑣語序」は左右双辺、 点 は左右双辺、 部文字を通行字に改めたり、 (寸法) の書誌情報は、 兀 刪 なお、 cm 五井蘭洲著、 二十五·八×十七·八 (版式) 無界、 以下、 「刻質疑瑣語序」(中井履軒による) 左右双辺、 次の通りである。 七行十三字。 資料の引用に際しては、 明和三年序、 原文にはないルビを振 無界、 有界、 cm 〔装丁〕四針眼訂法。 読者の便宜を考慮 大阪文淵堂・ 五行十字。「質疑 九行二十字。 大阪大学懐徳堂 郭内十九・ できるだ 九 は ×
- (3) なお、本書については、 した と記している。 乎異端」について、 を窺うことのできる貴重な資料である。 朱筆書き入れが見られ、 ている。『質疑疑文』は履軒の自筆手稿本で、 の中の疑問の存する点についてまとめた上で、 削ルベシ」、 洲 の草稿の形成過程は不明であるが、この 『質疑疑文』という文献も大阪大学懐徳堂文庫に残され 履軒が墨筆で「欲皆使学者 『質疑篇』の稿本は懐徳堂文庫に残 中井竹山が朱筆で一異乎條貫、 中井履軒が 『質疑篇』 が刊行される以前の過程 『質疑篇』 それによれば、 皆当在欲之上 『質疑疑文』 所々に竹山 中井竹山に質 刊行の際にそ っておらず、 乎ノ字恐

注記により、

稿本では、もともと「異條貫」が「異乎條貫」、

4 前後。 『非物篇』の書誌情報は次の通りである。大阪大学懐徳堂文 法) 二十七·二×十八·七㎝。郭内二十·六×十三·五㎝。〔書 庫蔵。三巻六冊、五井蘭洲撰、 皆欲使學者」が 四周双辺、有界、 版心に「(黒魚尾)(篇名/葉数)懷徳堂」と記す。 「欲皆使學者」となっていたことが分かる。 白口、黒魚尾の紙を使用。 明和三年、 中井竹山手稿。 十行二十字

5 『質疑篇』における『論語』関係条は、 徂徠の説に直接触れない本条は、 批判しているために、徂徠の説との違いが明確に読み取れる。 ら批判する訳ではないので、『質疑篇』のみを一覧しただけ を意識したものになっている。 『非物篇』は、先ず『論語徴』の該当説を引用し、 蘭洲の真意が分かりづらくなっている。これに対して やや特殊な条であると言えるが、「異端」 ただ、 『質疑篇』の 徂徠の説を引用してか 概ね徂徠の『論語徴 『論語』 その後、 に関 関係

三十三葉、

十六)三十三葉、

第六冊(巻十七~二十および附録)本文

一十五葉および附録十七葉

年丙戌長至日。〔装丁〕四針眼訂法。第一冊

第二冊(巻三~五)三十三葉、 第四冊(巻九~十二)三十三葉、

第三冊 (巻六~八)

(巻一・二)

兀

第五冊(巻十三

題簽「非物篇」。打付け書き「正編」。〔奥書〕明和三

篇

冒頭のみ篇名を記す。

[内題] 「非物篇

(序/巻数)」。

条の中でも、

する蘭洲の徂徠批判は、 である。 後に『非物篇』で明確に示されたの

6

- いる。 篇 『論語』解釈という大枠を外してみると、 その巻之中「異端篇」では、老子や仏教を異端として述べて となる。後述の中井履軒には いる。また、 があり、 そこでは、 履軒の弟子の山片蟠桃の『夢ノ代』にも「異端 明確に、仏教を異端として批判して 『水哉子』という著作があ この点はより明瞭
- (7) こうした徂徠批判に対して、 也。 とになる、と説くのである。この点の詳細については、 異にする者)と定義した上で、異端にも適する所があるから、 生ずるのみ)。すなわち、「異端」を「異見」(自分と見方を 此く力を竭くして之を攻むれば、其の功を無にして其の害を ち断々之を攻むれば、或いは吾が道の区域を削小するに至る。 其の端を別にす。 説を弁護し、さらに続けて次のように説く。「「異端」謂異見 ている。 包容して残しておけばよい。 (「異端」とは異見を謂うなり。蓋し各々其の見有り、見は各々 る再反論の書であるが、その「攻異端章」で、 或至削小吾道之區域。此竭力攻之、無其功而生其害也已_ 蓋人各有其見、 藤澤東畡 而るに苟くも己と見を異にする者には、 [辨非物] 見各別其端。 攻撃すれば、 は、 徂徠学派からは再反論も行われ 而苟與己異見者、 五井蘭洲『非物篇』に対す 我が道を狭めるこ 東畡は、 乃斷々攻

センターが運営するサイト「WEB懐徳堂」で公開されている。